

過去に、それとも未来に？

日本の農村にとって救いはどちらに...

〔 Backwards or Forwards —

Which way does salvation lie for rural Japan 〕

□ 『Unicommuni No.6 August, 1974』 より抜粋しました。

発行 — The Japanese Commune Movement

□ Matsuba Mose 著, ハマ 訳

I. 弥栄実践のアナキズム

私たちは、Unicommuni No.3で弥栄を郷共同伴が、常会へ部落自治会へ、個人的接触、野菜作りとその野菜の直販（通常の流通機構の搾取を排除するもの）などをとおし、村の構造的更新を模索していることを紹介した。

彼らはこれらを、お互いが協同するシステムによってのみ遂行できるとし、また、新しい社会的関係は、狭い個人主義とあたりさわりのない形式的な関係とに、とって替わると考えている。よく云われる政治構造は可能ながぎり無視される。人々は、自分自身のことを自分自身によってやっつけていく。これは、現在行なわれている実践的アナキズムのすぐれた

例である。

それは、今世紀の初めに、フーバーの偉大な友人、ムスタク・ランダーワールにより後のアナル・コソロジー・リズムの中で提唱された種類のものである。

しかし、弥栄において、ランダーワール主義が、必ずしも完全に廃れスムーズに進行しているわけではない。

が、彼らは使われていない土地を引き継ぐ許可を得つつあり、（日本の農村では過疎現象の進行で、土地はほとんど見捨てられていく）、全てのIndian style land-gift を探し求めている。アナキスト・コミューンへ弥栄は、これらの地域を彼らの買った土地とともに、村人と共に耕作しようとしている。そして

て、発展した野菜生産計画によれば、農民の収入を約々増加させることができると思われる。

ともかく、敷しいインフレの日本で、非常に質素な生活レベルにある彼らに対して、当を得ていることは認められる。

II. 社会・文化の更新を

さて、計画のアップルが、本質的に経済的なものであることははっきりしている。これでは利己的な商業価値の支配はそのまにされているし、新しいscio-humanist cultureを創り出す方向には全くないようだ。生産における新しい協同は、もちろん人間関係を改良していく。しかし、個々人は、まだ、自分の家族のために個人的に闘っている。システ

ムが社会システムを決定するというマルクス主義の見解が、ニニではアナキストたちの行動によって正当化されているようだ。

しかし、彼らはもちろん、マルクス主義の共産主義発展の核心である中央集権とは、全く違っていることをはっきり主張している。

III. 荒廃から蘇生へ

彼らは、今ある計画の社会的基盤は部落であると説明する。

部落に因するキー・ポイント、それは、完全に地方の行政機関から独立したもので、純粹の直接民主主義を自分らのために持っている。この親切な、完全に非形式的な集団の構成員たちは、時々、互いに手助けしあい、アナキズムを実現している。

それで、ちよつとふり返って、この古い時代のシンフルな協同を考へることは、弥栄の、今日の荒廃した村落社会を更新しようとするものらにとつて、あるインスピレーションを与えている。彼らは、日本の伝統の上に新たなものを建設することによって、村落社会を蘇生させることができると感じている。

IV. キブツと村落社会

生活の全ての面をカバーする完全な協同、それはキブツである。キブツでは、生産・消費・文化・医療・教育……全てがひとつの進歩的・自律的な地域社会に結合されている。その中で人間関係の眞の発展が得られるなら、（非常に難しいことで、イスラエルの模範に因して云えば、

実際問題として、かなりのところで失敗にあわっている古い形の村のコミュニティは部落のシステムのように、社会的・経済的関係において、賞賛されるべきものがある。が、全体としてキスリに較べるべくもない。しかし、部落は民衆の精神とよく一致しており、その現代的修正はすばらしい動きだと思われる。その展開にとって、自己訓練されたアナキスト・オーガナイザーの小さな核集団が、キスリ的に部落の中に住むことは重要な意味を持つ。

そして、主要な点は、二の種の組織核は村の中で十分に融和 (integrated) されねばならない。十分にコミュニティ的なキスリの共同生活は、世界中の農村の民衆にとって、太平洋民族の一部にみられる "long hou

ses" のような、きわめて希な土着の例を除いて、異質のものである。

キスリは、イスラエルはもちろんのことではあるが、だとしても、まさに西洋的な発展である。一方で、それは日本の村人たちの非常に実際的な要請だろう。他方、日本の村人たちは、今や極端に西洋化され、彼らの生活は徹底的に資本主義的・物質主義的なテレビによって支配されている。そして、いくつかの日本の農村は、大部分、宗教的な集団を組むことができることを昔から示してきた。キスリはすでに農村にあるのだ。

山賊出版、新パソフ登場……

流通機構を撃て。

— 青果資本のミステリーを追う

部落たすキスリは コミュニティ……？

しかし、二の関連において、主要な点は、へキスリ、それ自体は必然的に閉ざされたコミュニティである。と云っていることである。

もしそうでないなら……「もし」だが、弥栄の場合のように、それは自己を組織する目的のための小集団（だからそれは、社会的・文化的に全く不完全なものだ）に限定する。それは自立的なコミュニティではありえない。それはどちらかなのである、同時に両方ではありえない。

結局、多くのケースで二つの明白な対立点が真に相互矛盾的でないところはあるのか？ 私たちはキスリ的なものを持つ部落、すなわち、鮮生させた村をイメージできないの

村に生命を

とりもどす道は

無數の共同が可能であり、そして望まれる。どのような狭い排他的な解決も人間の複雑な心理にとって、正しいものではない。人間の問題に關する限り、詳細な計画など無意味であり、試行錯誤が意味を持つ。ヘランダーワールは、このことについて見事に気付いていた。しかし、基礎的なヒューマニスト原則の柔軟な構成は要求される。搾取的・ロケット的な傾向は、原則において始めから排除されねばならない。さもないと、彼らは避けがたく、私たちの微妙な心理状態はあるかままでのものとして、自由を恫れ、束縛を受け入れるのだというところへ行ってしまう。

۷.

そして、この問題提起の終わりに

二の文のタイトルとしてかかげた質
向が残される。今日、日本の村に生
命をとり戻そうとする私たちの試み
のモデルの追求を、私たちは過云に
求めるのか、未来に求めるのか？

——「部落」なのか、「キブツ」なのか、
それとも両者のなか。

※モシエ氏は現在、日光協同農園（今市市土沢）にて、ランダウアー研究中。



いろいろはた

★今朝は霜が降りていた。おそろく

彌策は冷たい銀世界。あの今にもつ
ぶれそうなら、ぐき屋根の下には、
きつとなつかしい煉炭のにおい……。

★あれやこれやでやっぱり遅れたNo. 21。今号は、この一年のおもな活動

報告・特集号。弥栄の土を耕すよう
 になって、もう3年。「え、そんな

になるのか」と、思わず指を折って
かきえ直してしまった。

★告知板
正月キャンペーン。1~4日(予定)

現在、広島・弥栄にいるメンバーも大阪へむうな集結、7日の晩には講師を招いて学習会の予定。

★おたよりください。
(富根県那賀郡弥)

栄村三里 栄榮之郷共同体（弘島市安古市大字
上安之のう供給センター）（田条嶺前野田）之三云々